

第三章 竹嶋記事・綱文一覧

竹嶋記事一

001竹嶋記事序

002竹嶋記事編集之凡例

101癸酉元禄六年五月十三日、於江戸御老中土屋相模守様より此方御留守居江被仰渡候者、去年朝鮮人竹嶋と申所江漁として罷越候を松平伯耆守方より見届、重而不罷越候様ニと被申含候所、当年又々朝鮮人四拾人程罷越漁いたし候故、其内式人召捕置、公儀江及御案内候ニ付、則長崎奉行所江送届、対州江被相届候様ニと被仰出候、委細長崎奉行所より可申参候間、向後不罷越候様ニと対州江申遣候得之由被仰渡也、

102同六年六月、竹嶋江罷越被捕置候朝鮮人式人迎護として御使者嶋雄菅右衛門長崎江被差越、御奉行所江被仰遣候ハ、当年竹嶋と申所江朝鮮人四十人罷越猶いたし候を松平伯耆守様より被見届、右之内式人被召捕置公儀江及御案内候付、其元江被送遣候条各様より請取候様ニ、委細ハ各より可被仰渡之旨於江戸去ル五月十三日土屋相模守殿より家来被召寄被仰渡候、依之使者差越候間具ニ可被仰聞由被仰遣也、

103同六年七月、迎護之使者嶋雄菅右衛門長崎より帰着在之、竹嶋ニ而被捕候朝鮮人六月晦日長崎江致到着、勿論朝鮮人申分取鳥ニ而之口書ニ相違無之候得共、此段江戸表江御注進ニ被及候故、江戸御下知次第朝鮮人御使者可被相渡候、夫迄御使者逗留之儀如何ニ被思召候間帰国候様ニと御奉行所より被仰渡、朝鮮人不相受取帰国在之也、

104同六年七月、再度迎護之為御使者一宮助左衛門長崎江被差越、御奉行江被仰越候者、竹嶋江罷渡候朝鮮人其地江相達御吟味之上相違之儀無之候付、江戸表江御注進被成候御下知到来迄朝鮮人之儀其元ニ差置候家来江御預ヶ置被成候由致承知候、此度之朝鮮人者格別之訳ニ御座候故、船中警固又々使者被差越候と之儀被仰遣也、

105同六年八月十四日、長崎御奉行所江朝鮮人迎使一宮助左衛門并此方御留守居浜田源兵衛被召寄、御奉行川口攝津守様・山岡対馬守様御同然ニ被仰渡候ハ、今日江戸表より御到来在之、竹嶋江罷越候朝鮮人対馬守殿江相渡候様被仰付候間、源兵衛江御預ヶ置被成候朝鮮人式人迎使相受取令帰国候様ニと被仰渡、則助左衛門請取候也、

106同九年九月三日、竹嶋江罷越候朝鮮人式人迎護使一宮助左衛門相付御国着船也、

107同六年九月四日、大目付内野九郎左衛門を以朝鮮人問情被仰付也、

108同六年十月、竹嶋一件之儀被仰遣候大差使之正官多田与左衛門・都船主内山郷左衛門・封進寺崎与四右衛門渡海被仰付、礼曹參判江以御書簡、近年貴国之船日本之内竹嶋江罷越候付重而不參様ニ申付追返し候所、当春又々貴国之漁民四十人程竹嶋江罷越漁仕候故、為後証其内式人召捕始終之様子具ニ領主より公儀江案内有之候ヘハ、今度之儀者被差返候、重而彼地江不罷越候様ニ堅く可申渡旨從公儀蒙仰候、如斯之仕形至而大切成事候条、急度可被仰付候、則兩人之者今度送返、右之趣使者委曲口上ニ申含候と之儀被仰遣也、

109同六年十一月一日、多田與左衛門一行渡海、即夜絶影嶋江繫船、翌二日館着也、

110同六年十二月十日、與左衛門一行茶礼設行、接慰官并東萊府使被罷出、於太庁対面、御書簡渡之、勿論竹嶋江罷越候漁民式人太庁之庭上ニ而渡之、相濟而從東武被仰出候御用

之趣論談、往復在之也、

111同六年十二月廿二日、與左衛門一行封進宴席設行有之

112甲戌元祿七年正月十五日、接慰官より為使差備官朴同知・金判事、訓導卞同知入来、御返簡之儀、昨日大坊金判事持下り候付写持參候、且又御使者より馳走之儀及御辭退候故、都表より他国之使者江馳走不仕筈無之候条、是非馳走を被請候様ニ可仕旨申來候と之儀ニ付委細之儀朴同知江及論談也、

113同七年正月、御返翰写到来ニ付、與左衛門方より阿比留惣兵衛江返翰之次第委細申含、御返簡写御國江差上之、

114同七年二月十五日、與左衛門御返翰請取之意趣ハ、朝鮮海辺之制禁至而嚴重なる儀ニ而海辺之漁民外洋江出候事を許之不申、我国之蔚陵嶋さへ遠方之事故、心次第二罷越不申様ニ仕候へハ況其外二者猶又遣し不申候、然所ニ此度我国之漁船貴國之竹嶋江罷越候由ニ而被送返御隣好之談誠致感激候、海辺之者共漁を以生業といたし候故、惡風ニ遭イ漂流之患可有之事ニ候得共、境を越し入交り漁採仕候段於法式戒メ可申儀ニ御座候故、右之者共法律之通罪科ニ申付候、此以後海辺之所江各別ニ嚴敷申付候と之儀、礼曹參判・參議・東萊・釜山より申來也、

115同七年二月十八日、与左衛門一行出宴席設行在之也、

116同七年二月廿二日、與左衛門一行朝鮮表乗船、同廿四日鰐浦御関所帰着也、

117同七年二月廿九日、渡海訳官安同知・朴僉知・金正府內在留ニ付、平田隼人・裁判平田所左衛門・高勢八右衛門、客館江被差越、竹嶋一件之參判使多田與左衛門帰国之所、返簡之趣不宜候付、與左衛門儀再度御使者被仰付被差渡候間、三訳使貴國之節朝廷江宜申達候様ニと被仰渡候所、奉得其意候、致帰国宜申達旨、三訳使申上ル也、

118同七年三月、大差使之正官多田與左衛門・都船主番柳左衛門・封進寺崎与四右衛門渡海被仰付、竹嶋一件ニ付最前ニ使者差渡候所、御返簡之内ニ蔚陵嶋之儀相見ヘ申候、此方より蔚陵嶋之儀不申達候所彼嶋之名目相見候段難落着候間、是文字被差除可然存候ニ付、再渡使者を以申入候と之儀礼曹參判・參議及東釜江以御書簡被仰遣也、

119同七年閏五月十三日、與左衛門一行渡海、館着、

120同七年七月廿一日、於江戸表竹島返簡之写並返簡之内ニ蔚陵嶋之文字在之不審ニ相見候故、委細彼國江相尋候為使者再渡差渡置候趣、御口上書被相添御老中阿部豊後守様江被差上也、

121同八年八月九日、與左衛門一行茶礼設行、接慰官・東萊府使被被罷出、於太序対面、御書簡渡之、最前之返簡蔚陵嶋之文字除候様ニと之論談往復在之也、

竹嶋記事二

- 201甲戌元禄七年八月廿五日、與左衛門一行封進宴席設行在之、去年與左衛門請取帰候返簡差返、
- 202同七年九月六日、與左衛門一行中宴席設行在之、
- 203同七年九月十二日、與左衛門返簡請取之意趣ハ、朝鮮之江原道蔚珍縣ニ屬嶋在之蔚陵嶋と申候、江原道東海之内ニ在之候得共風波險敷船路不宜候故中年彼嶋之民を外江移し空地ニ仕置、時々官人を遣し検分させ候、蔚陵嶋の山々峯々樹木等迄地方より相見え山川土地の広狭并民居之旧跡土産之品等迄我国輿地勝覽之書ニ載セ之、代々相伝事跡明白ニ在之候、只今我国海辺之漁民其嶋江罷越候所不存寄、貴国之人犯越いたし居候所江行逢、却而二人を被捕江戸へ被差越候所、幸ニ貴国大君之御明察を蒙り以御馳走御送還被下、御隣好之御丁寧尋常之儀ニ無之段誠以感心仕候、扱右我国之漁民罷越候地者元來蔚陵嶋と申嶋ニ而竹多く在之候故、或ハ竹嶋とも唱、一嶋ニ而二つ之名御座候、一嶋ニ名之次第我国之書籍ニ記し候のみニ無之貴国之人も皆存知たる事ニ候所、此度之書簡ニ竹嶋を貴国之地と思召我国之漁民彼嶋江参り候儀を禁制いたし候様ニと被仰下、貴国之人猥ニ我国之境を犯し、我国之人を捕江候不調法を被差置候段、御誠信之道を被欠たる御事候、此等之趣江戸表江被仰上、貴国之海辺江巖敷御触レ被成、以来貴国之人蔚陵嶋江罷越不申様被仰付、両国間之弊端出来不仕候様ニ被成被下候様ニと之趣、礼曹參判・參議・東萊・釜山より申来也、
- 204同七年九月、御使河内益右衛門渡海被仰付、天竜院公御意之趣與左衛門方江被仰越也、
- 205同七年十月三日、與左衛門一行出宴席設行いたし、今般渡海之返簡不相請取候而者難罷成旨、接慰官東萊江論談有之、
- 206同七年十月、裁判高勢八右衛門并御使河内益右衛門帰國在之
- 207同七年十月六日、接慰官帰京有之、
- 208同七年十月、朝鮮之兵使蔚陵嶋檢分之命を蒙り彼嶋江罷越候段、差備官方より裁判方江申聞ル
- 209同七年十一月十六日、靈光院公御逝去之段國元より使を以申来候間、與左衛門方より東萊江申達ル、
- 210乙亥元禄八年正月九日、天龍院公州務御再任被蒙仰候段、與左衛門方より訓導・別差を以東萊府使江申達ル、
- 211同八年正月、與左衛門一行之差備訛官朴同知帰京仕ル
- 212同八年五月、天竜院公思召之旨在之與左衛門一行帰國被仰付、依之裁判高勢八右衛門・陶山庄右衛門・阿比留惣兵衛三人江與左衛門請取置候返簡之内御不審有之所委細被仰付朝鮮江被差渡、與左衛門申談候疑問之書付東萊江遣し、彼方返答承り候上與左衛門儀令帰國候様ニ被仰渡也、
- 213同八年五月十五日、與左衛門方江訓導・別差召寄せ、與左衛門・僉官中・館守・裁判同然ニ対面之上、此度與左衛門儀天竜院公より帰國可仕旨被仰付ニ付、請取置候返簡之内不審之所東萊江申達候、御返答承届帰國不仕候而ハ不罷成事と存候付、其趣書付ニ相認東萊府使江進之候、且又僉官中兩度渡海ニ付御馳走を受ケ置候得共、此節帰國ニ付御馳走之

品不残致返進候、都表江右之段早々被及啓聞候様ニ東萊江可申達旨申渡之、

214同八年六月十日、與左衛門方より東萊江遣し置候疑問之返答未無之候ニ付、與左衛門方より東萊江一通之書付を館守・裁判江相渡し置、與左衛門一行上船仕ル也、

竹嶋記事三

301乙亥元祿八年六月、天龍院公被仰出候者、竹島一件再度返簡不宜候付、書改之儀朝鮮江可被仰掛候と之御儀ニ而、大差之正官杉村采女・副官幾度六右衛門・都船主陶山庄右衛門・封進木寺利兵衛被仰付置候所、同七月ニ至思召之旨有之候付渡海可被差延と之儀被仰出也、

302同八年十月、天龍院公御參府、竹島一件再度之返簡写被差上跡之御処置如何可被遊哉と之儀、御老中阿部豊後守様迄委細御伺之趣被仰上也、

303丙子元祿九年正月廿八日、天龍院公御登城、御暇御拝領被遊候上、於御白書院御老中御四人御列座ニ而、戸田山城守様竹嶋之儀ニ付御覺書一通御渡被成、先年以來伯州米子之町人兩人竹嶋江罷越致漁候所、朝鮮人も彼嶋江參致漁、日本人入交り無益之事ニ候間、向後米子之町人渡海之儀被差留候と之御儀被仰渡也、

304同九年六月廿三日、於江戸御老中大久保加賀守様江此方御留守居被召呼、御直ニ被仰渡候者、朝鮮人隱岐国江罷越御代官江申聞候ハ、因幡江訴詔之儀在之候由ニ而因幡江参り候得共曾而言語通し不申候、就夫通詞之者江戸・大坂江被召置候ハ、伯耆守殿家來方江申合せ、同然ニ早々因幡江被差越候様ニ、朝鮮人言語通し不申候付、次郎殿江者通事之事一通り之事ニ候、委細者書付を以可申達候、惣而因幡州江朝鮮人参候ハ、長崎奉行所江差越、彼方ニ而諸事申達候様ニと御先代被仰付置候ニ付、此度も右之通因幡ニ而申付候得共承引不致候、平生之漂流人と違ひ候付、通詞之事被仰渡候と之儀也、

305同九年七月七日、江戸表より飛脚到来、去ル六月朝鮮人因幡江罷渡り候付、從此方通詞之者被差越候様ニと之儀、大久保加賀守様より被仰渡候旨申来候付、因幡江之御使者鈴木権平并真文役阿比留惣兵衛・通詞諸岡助左衛門・加勢藤五郎被仰付、江戸表江之御使者賀嶋権八被差越、天龍院公思召之趣被仰含、於江戸在番之家老中より阿部豊後守様江相伺候様ニと被仰遣也、

竹嶋記事四

- 401**丙子元禄九年七月廿四日、天龍院公思召之趣御口上書ニ相認、阿部豊後守様ニ大浦忠左衛門持参いたし、大久保加賀守様江者御留守居鈴木半兵衛參上一通り御届申上候所、即晚忠左衛門儀豊後守様江被召呼、御直ニ御返答被仰聞御書付御渡被成也、
- 402**同九年八月六日、因幡江訴詔之儀申出候朝鮮人、因州之湊出帆、帰国仕也、
- 403**同九年八月十八日、因幡江之御使者鈴木権平并阿比留惣兵衛通詞兩人因幡之内餅ヶ瀬村と申所迄罷越候処、松平伯耆守様より之御使者飯嶋夫大夫御城下鳥取より出迎イ、権平及對談候所、朝鮮人之儀者対州御一手ニ被仰付置候故、不依何事他方より取次不申筈ニ候間帰帆申付候様ニと江戸表大久保加賀守様より被仰付、朝鮮人去ル六日因州出帆仕候間、権平儀御城下迄罷通候ニ不及候間、直ニ罷帰候様ニと伯耆守様被仰候旨、御使者夫大夫申聞候付、天龍院公より之御状も不差出、権平儀直ニ因州発足仕ル也、
- 404**同九年十月、天龍院公御再任之御賀儀并靈光院公弔慰相兼、訳官両使卞同知・采判事渡海ニ付、十月十六日於御屋鋪天龍院公両使江御対面、竹嶋之儀、因幡・伯耆江付属と申事ニ而も無之空嶋ニ而伯耆之者罷越漁仕候迄ニ候、近年朝鮮人罷渡り入交り如何ニ候故、重而此方之漁民渡海不仕候様ニ可被仰付と之儀、於江戸表ニ被仰渡候旨、両使江天龍院公御直ニ被仰渡也、
- 405**同九年十月、天龍院公竹嶋之儀訳使江被仰渡候段、江戸表江御案内被仰上候、御使者鈴木権平被差登、権平儀十二月九日江戸表江參着、同十三日御老中阿部豊後守様・御用番土屋相模守様江竹嶋之儀御案内之御連状等持参、差出候也、
- 406**丁丑元禄十年、渡海訳官卞同知・宋判事帰国、裁判高勢八右衛門を以護送被仰付、則竹嶋謝書被差渡候様ニと之儀裁判より催促仕候様ニ被仰渡也、
- 407**同十年四月廿七日、竹島之儀ニ付謝礼之書簡東萊江下り来候由ニ而、両訳入館、書簡之写持参仕也、

竹嶋記事五

- 501同十年七月廿一日、竹嶋一件謝意之書簡改撰在之、都より下り来候由ニ而、訓・別写持参、館守・裁判方江渡之也、
- 502同十年九月十六日、裁判高勢八右衛門年条宴享之序東萊江致接待、竹嶋一件謝書改撰之儀申達ル也
- 503同十年九月、館人闡出之事ニ付都より申来候趣有之、東萊府使館守江致対面度旨訓・別を以被申聞候故、九月廿九日送使宴享之序館守唐坊新五郎大庁江罷出東萊江致接待、則闡出并竹嶋一件謝書之儀等申談ル也
- 504戊寅元禄十一年正月、新東萊府使下府之処、訓・別を以館守江致対面度と之事ニ付、正月十九日送使宴享之序館守儀大庁江罷出東萊江接待いたし竹嶋謝書之儀申談也
- 505同十一年裁判高勢八右衛門儀、日本人闡出之事ニ付、職分を致忘却候故竹嶋謝書裁判江者相渡申間敷旨都より申來、訳使護送之返答共ニ不相請取、以飛船帰国仕也、
- 506同十一年四月、竹嶋一件謝書都より到来、同月四日訓導・別差持参、館守唐坊新五郎江相渡ス、其書面ニ、訳官ニ被仰聞候趣委細承届候、鬱陵島元来我国之土地ニ而候段者輿地勝覽ニ書載有之明白なる事ニ候得者、貴國江遠く我国江近きと申事を論し候ニ不及、境界元より相別レ居申候、貴州既ニ鬱陵島竹嶋一嶋ニ而二名之段能御存之事ニ而、名ハ違ひ候得共地ハ一つニ御座候、依之江戸より命令を以貴国之人彼地江罷越漁不仕候様ニ被仰付候と之御事、江戸表御丁寧之御心交隣永久可仕と珍重ニ存候故、於我国も役人共江申渡し、時々彼嶋を搜査致させ両国之人混雜不仕様ニ可申付候、扱又去年之漂人之儀者、海辺之下民舟乗りを業と仕候者、惡風ニ遭イ、不存寄致漂流、貴國之地ニ罷越候事ニ候間、約条ニ違ひ他方より致渡海候と之御疑被成被下間敷候、其節差出候書簡之儀者誠ニ偽作ニ御座候故、其者儀者死罪ニ申付、以来之戒と仕り、猶又海辺之者共江も嚴敷申付候、以後弥誠信を御整被成辺上無事なる様ニ在之候へかしと存候、竹嶋之儀訳官渡海之節御口上ニ被仰聞、御使者を以不被仰越段者旧例之通規外之御使者被差越間敷と之御心と察存候と之儀ニ付、館守請取之御書簡御国江持渡り候、使として一代官平山九左衛門申付飛船を以差越之也、
- 507戊寅元禄十一年五月、竹嶋一件礼曹より之謝書江戸表江被差上候付、御使者平田直右衛門被差登、七月十七日、右謝書御老中阿部豊後守様江差出也、
- 508己卯元禄十二年正月、竹嶋一件礼曹より之謝書、去年江戸表江被差上候付、今般天龍院公より御返簡被遊、先年訳官渡海之節竹嶋之儀口上を以申達候所具ニ御聞届被成候由、両国永久之儀と珍重ニ存候、規則其趣東武江及言上候と之儀礼曹參議江被仰遣、館守江之御使阿比留惣兵衛被仰付、持越之豊後守様より被仰聞候通彼國不念之所も館守を以て東萊江被仰せ達候也、
- 509同十二年十月十九日、江戸在番之家老大浦忠左衛門儀、阿部豊後守様江参上仕、去年差上候竹嶋一件礼曹謝書之返簡、当春彼地江差越、館守を以東萊江相渡し、尤彼國此一件ニ付不念之次第も館守より口上を以申達させ候段、御案内申上也、
- 510（跋文）